

「対外漢語教育拠点」大学における留学生向け中国語課外教育に関する調査研究

プロジェクトメンバー：張宏波、洪潔清、渡辺祐子*（*：代表者）

本プロジェクトでは、中国の代表的な留学生向け中国語教育拠点を訪問し、課外教育に関する実態調査に取り組んだ。

I 首都師範大学(北京)訪問

(1) 9月下旬に首都師範大学を訪問し、外国人留学生向け中国語教育担当者および本学から1年間の長期留学を始めたばかりの学生にインタビューを行った。本学からの留学生については、学習環境や生活環境に関して不満はなく、充実した日々を過ごしているとのことだった。課外プログラムとしては、中国文化の体験プログラムが複数準備されており、本人は中国のニュース報道などを視聴する活動に参加していた。有料ながらHSK（世界規模で実施されている中国政府公認の中国語検定試験）対策講座も充実しており、日本では年に4回しか実施されない試験が毎月のように受験可能であるため、日々の学習成果を測定する目安にしやすいということだった。

(2) 12月下旬に同大学を再訪し、留学生教育を担当する国際文化学院の張静副院長ほか関係者にインタビューを実施した。

授業面では、筆記及び口述の試験のあとクラスが編成され、その後に本人の希望に応じて個別に調整することも可能になっている。

生活面では、日本人留学生の滞在する学生寮は1人部屋、2人部屋、4人部屋がある。当初は国籍を考慮することなく配置していたが、現在は出身国が同じ留学生が同室に固まらないようにしている。

課外教育としては、

(a) 各学期に「万里の長城」や「鳥の巣」などの社会参観、カンフーや劇、映画などの鑑賞を大学として定期的実施している。大学の運動会への参加も促している。授業の一環として北京の「老舗」商店を訪問する取り組みも行われている。

(b) 特徴的だったのは、大学が所在する北京市の政府や北京市海淀区政府が、市民と留学生との交流の場を定期的につつようにしていること。具体的には、歌や会食の場に加え、作文やスピーチのコンテストを主催している。そうしたイベント情報を留学生に伝え、参加を奨励し、参加学生をサポートする業務も学院として留学生辦公室とも協力しながら積極的に推進している。市民との交流については学院が主体となる形でもチャンスをつけており、北京市民の家に一日滞在するという機会も準備している。また、全中国規模の留学生イベントも増えており、参加を希望する留学生をサポートしている。

(c) 外国語専攻の中国人学生が留学生の様々な活動のボランティアを行っている。

(d) 外国人留学生会の活動にも経費面でサポートしている。留学生会は企業参観の企画、中国人学生団体との交流等、学内外の交流活動に積極的にかかわっている。留学を終えた後も、

就職するなどして現地にとどまろうとする学生が増えている。大学全体の学生活動センターで運動やグループ活動を行っている留学生も少なくない。

(e) 学院の留学生管理事務室には8名の専任教員がいて、日本語専門のスタッフも1人いる。学習や日常生活の悩み、体調不良などにも細やかに対応している。

(f) 様々な課外活動に積極的にかかわっている留学生には、活動そのもののサポートだけでなく、奨学金選考の際にプラス評価とするように配慮されている。

(g) 以上のような取り組みが評価されて、日本の文科省にあたる教育部から「来華留学示範基地」(留学生教育モデル校)の認定を受けている。

(h) 課外教育の効果としては、授業だけでなく現実の場で中国語を使う機会に多く触れることで、授業中だけでなく積極的に中国語を使ってみようとする学生が増えたとのことだった。

次に、国際文化学院で実際に留学生への中国語教育を担当している教員からもインタビューを行った。課外教育の担当者ではなかったため、普段の授業のなかでの取り組みを中心に話を聞いた。全体としては中国語を学ぶために留学しているだけに非常に学習意欲が高く、特別な工夫をせずとも一定の学習効果が達成されているという。それでも、近年は以前ほど積極的に学習しない留学生も増えてきたとのこと、そうした学生にとっては課外教育など多様な回路を準備して、学習動機を刺激する必要があることは認識されていた。

さらに、留学後2年目～3年目のカンボジア人留学生十数名のグループにインタビューする機会も得た。学習環境や奨学金の充実度、生活環境の面で全般的に満足度が高い様子が伝わってきた。中国での就職を希望する学生が多いことも印象的だった。

今後の課題としては、日本人を含めた留学生への聴き取りを実施し、課外教育の効果を確認することが必要である。これまで何人かの学生から断片的に話を聞く機会があったが、教育提供者の発想とのギャップが存在していたことが確認できたからである。また、留学生をサポートしている現地学生へのインタビューも行う必要があると考えている。継続調査を実施したい。

II 大連外国語大学(大連)訪問

(1) 10月上旬、大連外国語大学に留学中の亜細亜大学からの日本人留学生11名中5名を訪ね、留学生活が1ヶ月を過ぎた段階の学生たちへのインタビューとキャンパス見学を実施した。

(a) 学習環境：クラスは語学能力に応じて細かく編成され、入門、初級の各レベルだけで7クラスずつ設置されている。体験受講の後で、クラス変更も可能になっている。自分の語学力にあったクラスで学習できている点には一様に満足していた。日本の他大学や他国からの学生もいる混合クラスでは、他国からの留学生と違って「漢字」に頼ってしまい、〈会話〉能力が劣っていることを痛感しているという。

(b) 生活環境：食、住、スポーツなどの生活環境への満足度も高い。現地中国人学生との

2人部屋は清潔で明るい。郊外型の大学だが、3階建ての福利棟のほか、キャンパス周辺にも食事や買い物ができる店が多数揃っている。体育館や運動場も自由に利用でき、中国人学生や留学生同士の交流の場にもなっている。日本人留学生の感想として「キャンパスとバイト先、自宅の間を忙しく移動する日本での生活より疲れず、学習に集中できる」との言葉が印象的だった。市の中心部まで1時間近く要するが、格安の連絡バスが休日中でも1時間に複数台が運行されていた。

不満点としては、留学生のための事務手続きや生活に関する相談窓口が十分整っておらず、対応も不十分な点が挙げられていた。中国語能力の高い留学生や中国人学生に頼って自己解決している点は問題視されていた。

(c) 課外教育：亜大生は全員が寮で日本語専攻の現地中国人学生とペアで暮らしており、語学はもちろん、習慣や文化、社会、政治などをめぐって多面的に交流していた。日本語能力がきわめて高い中国人学生もいて、日本人学生が頼り切って中国語を使えないという弊害も自覚されていた。大学としては、そうした環境で学生同士が自主的な交流を展開することに期待していた。留学生を交えた文化祭、音楽祭も開催されている。

ペアになっている中国人学生2名にもインタビューしたが、ペア学生になることを希望する中国人学生30名以上から選ばれた11名だけに、積極的で能力も高かった。日本語専攻あるいは日本語ともう一つの専攻を有している学生が対象になっている。こうした共同生活を除けば日本人と直接話す機会は多くはないとのことで、ペア学生になったことに満足していた。

HSK（中国語検定試験）のための補講も準備されていた。これは亜大の留学プログラムに組み込まれているため、大連外大側が独自に対応して設置したとのこと。1ヶ月～2ヶ月間の集中講座となっている。

III 大連理工大学(大連)訪問

1月上旬、代表的な対外漢語教育拠点ではないものの、全国重点30大学の一つである大連理工大学の国際教育学院での留学生向け中国語教育についても調査を実施した（同学院は、遼寧省の「来華留学示範基地」指定を受けている）。孫成志副院長からの聴き取りの内容は以下の通り。

東北三省のなかでは留学協定数をもっとも多い大学の一つだが、理工系を中心とする大学であるため、中国語専攻の学部・大学院の正規留学生数はそれほど多くはない（学部は年間40名前後）。語学留学は最長半年間までの短期留学が多い。近年は、協定先大学からの要望に沿ってプログラムを組み立てる方が、高い満足度が得られるようになっている。国際教育学院の担当教員は30数名。留学生の出身国別では、日本からの留学生が減少し、パキスタンやイランなどのイスラム圏や東南アジア諸国、ロシア語圏からの留学生が増えている。理科系の大学院への留学は、中国語による授業と英語による授業の双方のコースが設置されている。機械系などには帰国後に即戦力のエンジニ

アや研究者として活躍する人材も多い。

課外教育も充実しており、中国文化の理解に関する複数の講座、スピーチや作文に関するイベント、スポーツサークルの運営、大学祭への参加などが活発に行われている。留学生の関心も高い。企業参観や国営企業などでのインターンなどの社会実践プログラムも用意されている。

特徴的だと思われたものの一つが、学生ボランティアによるチューター制度。学部への留学生なら4年間通じて1人の中国人学生がチューターを務め、学習から生活に関する多様な相談に乗っている。学内には文理の専攻を越えて300名あまりのボランティアが登録されている。学部留学生にとって最初の2年あまりは心強い存在で、普段から食事などをしながら交流が続いている。

もう一つが、中国人教員宅へのホームステイ制度。費用がある程度必要となるため（1ヶ月3万円程度、朝夕2食付き）人数的には限られるが、学生の希望者は少なくない。ホームステイ先では中国語以外の使用が禁止で、教員の子弟と日常的に交流できるケースも多いことから評価は高い。教員は海外経験を有し、学生と同世代の子どもを持つことなど厳しい条件をクリアした人だけが対象になっている。

また、豊富な学生対応経験を有する定年後の教員も、留学生のサポートに積極的にかかわっていることも特徴の一つである。

IV 大連市主催の留学生スピーチコンテストを参観

12月中旬、大連市所在の各大学に学ぶ留学生らが競い合うスピーチコンテストの様子取材した。大連に留学している留学生は1万人を越えるという。スピーチをした41名のほか、聴衆も500名上の留学生で熱気に溢れていた。

運営の中心を担っているのは、本学の提携校でもある大連外国語大学漢学院で、毎年優勝者を出すほど力を入れている（今年の優勝者の一人は日本人学生）。

代表としてスピーチしている学生の背後には、サポートする教員や応援する学生仲間の支えが大きいことが見ていて伝わってくる。今回の調査で訪問した大連外国語大学や大連理工大学では、副学院長クラスを含めて手厚いサポートを展開していた。

※1月以降の予定

(1) 大連外国語大学での継続調査：

1月中旬に、亜細亜大学からの5ヶ月間の留学プログラムの総括報告会が実施されるため、参加してインタビューを実施する。特に、最後の1ヶ月に彼らが経験した現地企業でのインターンシップに関する聴き取りを行う。

また、留学生担当の教員からも聴き取りを実施する。

(2) 東北師範大学での調査の実施：

2月中旬に東北師範大学において課外教育プログラムの現状に関するインタビュー調査を実施する。
 ※今年度の聴き取り調査を終えて

訪問先の大学には、2+2、3+1という形での留学を希望する学生、大学が世界中から訪れていた。語学力だけでなく、専門分野の能力と合わせて力を付けていくことが求められているといえる。中国語学科のない本学でも、各自の専門分野と中国語学習を同時に深めたいという需要の方が一般的である。多様な課外教育を通じて中国語学習を支援し、2+2、3+1という形での留学を可能とするような仕組みと支援体制を整備していくことが、今後の課題である。